

革命と志士——朱舜水の受容から見る清末民初の政治的闘争

徐 燕斌（東京大学大学院）

要旨

本発表は、近代中国における朱舜水の受容を通して、清末民国初期の政治的闘争の有り様を浮き彫りにすることを試みる。

朱舜水は、従来江戸儒学に影響を及ぼし、明治維新に至るまで参照され続けた明末遺民とされている。日本社会にどれだけ浸透しているのかはともかく、近代日本においては「革命家」とも認識されていたことは間違いない。しかし、これはあくまで明治期の知識人たちが同時代の文脈に影響されつつ形成した朱舜水像だと考えられる。では、近代中国ではどうであっただろうか。明朝復興のために奔走した朱舜水は、明清鼎革の際に日本に亡命し、生涯に渡って日本の儒学振興に尽力していたが、清朝において朱舜水という名はほぼ完全に失われた。朱舜水は清朝において忘却されたというより、むしろ敵であることを理由に黙殺されたのであった。もっとも、内憂外患の清末になると、反清の志士として再び脚光を浴びるようになった。いわば、中国で無名であった朱舜水は二十世紀以降に日本から逆輸入されたものと言える。当然、両国の国家構造が異なるがゆえに、日本における受容とは異なった在り方をしている。清末民国初期における朱舜水受容が一時的に活発化していた時期がある。さらに、中国においても画一的に受容されてきたのではなく、対立する受容の在り方には近代中国の政治的闘争の一面を窺うことができよう。

本発表は湯寿潜、鄭孝胥、錢恂の三人を取り上げ、それぞれが朱舜水を如何に評価していたのかを明らかにし、民国初期の朱舜水顕彰の事業をめぐる知識人の言行から逆行して当時の官僚・知識人の間における政治的闘争の一側面を描出したい。